台湾の「海女（ハイルー）」に関する民族誌的研究

――東アジア・環太平洋地域の海女研究構築を目指して――

期間：2018 年 4 月 1 日～2022 年 3 月 31 日
［代表者］藤川美代子（南山大学）
［共同研究者］
藍紹芸（台湾基隆市八斗子漁村文物館）
新垣夢乃（東京福祉大学）
許焜山（台湾基隆市八斗子漁村文物館）
齋藤典子（東洋大学）
沈得隆（台湾基隆市八斗子漁村文物館）
兪鳴奇（歴史民俗資料学研究科博士後期課程）
安室　知（日本常民文化研究所）

2019 年度の活動報告

研究代表者　藤川　美代子

写真１　採れたての石花菜を真水で洗う（藤川美代子撮影／新北市貢寮区）

写真２　石花凍の製造過程（藤川美代子撮影／新北市貢寮区）

本共同研究は、１）台湾の海付きの村を対象に、海女の潜水漁・海藻の手繰り寄せ・その他の漁撈活動をめぐる民族誌的調査を実施し、それを「村のくらし」全体の中に位置づけて描くこと、２）漢族研究の文脈で台湾の海女民俗を捉えるための視座を獲得すること、その上で ３）台湾の事例を日本の海付きの村と比較しながら、東アジアあるいは環太平洋島嶼部全体を射程に入れた新たな形の「アマ研究」模索のための足がかりを摑むことを目指し、2018 年度より始動した。

2019 年度は、主に次の 4 ヵ所を拠点として現地調査を実施した。

A）新北市貢寮区龍洞・澳底：当地の男性・女性および原住民男性とその家族が行う海藻・貝・棘皮動物の採集の参与観察、「六泡六曬（石花菜の真水による洗浄・天日干し）」の過程と「石花凍（寒天）」・「石花凍飲（寒天入り飲料）」の加工過程および屋台での乾燥石花菜・石花凍・石花凍飲の販売戦略の参与観察をとおして、台湾東北角で展開される海産物の採集・加工・流通

の一端を把握することに努めた。

B）台東県蘭嶼郷：東北角の石花菜採集にとって重要なアクターとなる「水性（泳ぎの能力）」の優れた原住民の自然や海に対する観念を明らかにすべく、タオ族の生活・生業について参与観察を進めた。タオ族は東北角の石花菜の流通に関与しないが、東北角では閩南系の漢民族によって原住民が「この海に潜る権利はないのに、よそから来て金になる海産物を根こそぎ採ってしまう」との語り口で表象されるのに対し、タオ族は「自分たちは『親近海洋民族』だが、漢民族は『略奪海洋民族』だ。彼らは経済的な利益という利己的目的のために海洋生物を獲り尽くしてしまう」と語るなど、異なる論理によって互いを「資源を奪う者」と理解している様子がうかがえた。

写真３　タオ族のチヌリクラン（藤川美代子撮影／台東県蘭嶼郷）

写真４　オカイソの様子（藤川美代子撮影／静岡県下田市）

C）静岡県下田市須崎：テングサの採集（主に「オカイソ（潜水を伴わぬ漁）」）と「カイリョウ（天日干し・分別）」の過程の参与観察により、日本のテングサ市場では分類学上の種別と同種内の等級によって価格が決定される点が、同種内に価格の差をつけない台湾東北角との顕著な相違点であることを確認した。

D）沖縄県宮古島・本島：台湾東北角に石花菜採集・加工・流通のシステムをもたらすことになった日本統治時代以降の歴史的経緯を探ることに努めた。

さらに、日本側の研究者は韓国・釜山にて開催の The 7th East Asian Island and Ocean Forum 2019（2019 年 11 月 27 日～12 月 1 日）で分科会を組み研究成果を発表して、議論を深めた。

■ 2019 年度の活動

○伊豆下田予備調査　2019 年 5 月 3 日～ 5 日　静岡県下田市須崎地区　齋藤典子

○中間報告および打合せ、下田市須崎の海女（海士）と住民が共に行うオカ磯採りの調査　2019 年 6 月 28 日～ 7 月 5 日　国際常民文化研究機構、静岡県下田市須崎地区　藤川美代子・新垣夢乃・齋藤典子・許焜山・安室知・兪鳴奇

○植民地台湾のテングサ漁・流通に関与する沖縄県人漁業者と『寄留商人』についての調査　2019 年 8 月 6 日～14 日　宮古島市立城辺図書館、沖縄県立図書館、琉球大学附属図書館、沖縄県公文書館、うるま市立海の文化資料館　新垣夢乃

○台湾 澳底・龍洞・蘭嶼郷・台東現地調査、台北文献調査ほか　2019 年 8 月 26 日～ 9 月 10 日　台湾台北市、基隆市、新北市貢寮区澳底、台東県蘭嶼郷　藤川美代子・齋藤典子・許焜山・沈得隆・藍紹芸